

## 『人間文化研究所年報』第11号

写真は表題の「年報」表紙である。懐かしい大学東門と1号館が写っている。今号の特集は、人間文化研究所10周年記念事業『人間、地域、共生』をめざして—研究所の10年、回顧と展望—である。

寺田元一研究所長による特集「巻頭言」の一部を紹介したい。まずは私に関わることから。

第三代の研究所長である山田明先生を中心に発展したのが、研究プロジェクト「名古屋と観光」である。このプロジェクトは多少名前を変えながらも、現在に至るまでずっと継続され、その成果は『名古屋の観光力』（風媒社、2013）として公刊された。そこには谷口幸代先生（現在、お茶の水女子大学）による「名古屋の文学 — 俳人・馬場駿吉の見た名古屋」が収録されており、今回馬場先生に記念講演をしていただく機縁を作ってくれた。----- 今回山田先生にパネリストとして登場いただき、「名古屋と観光」に関わる発表をしていただいたが、重要なことは、この研究プロジェクトが、山田先生が退職された後も在職教員に継承されて続いている点である。年報第5号の特集は「持続可能な社会」で、その際に「5周年記念シンポジウム」も開催されているが、プロジェクトも持続的に発展させることが求められており、「名古屋と観光」はその模範となっている。

退職前8年余りにわたり、「名古屋と観光」研究プロジェクトに力を注いできたので、寺田さんの指摘は嬉しいかぎりだ。もう一つは、昨年12月の「記念シンポジウム」の会場発言から。

当日シンポジウム会場には、年配の方を中心にさまざまな聴衆が参加されていた。その方たちから興味深い質問や意見がいくつも出てきた。私の注意をもっとも引いたのは、障がいをもつ小学生（最前列で参加）の父親の方から発せられた質問だった。それは研究所の課題にインクルージョンを含めてほしいという要望を含むもので、研究所が初期には「障がい児の発達支援」に取り組んできたことから、当然の要望であった。同時に、その方が「越境の文学」に示された関心が非常に印象的だった。作家たちの越境という行為のうちに、障がい児と健常児の学校教育での選別を「越境する」試みを読みとり、「学問にはすべてつながりがあることを実感した」と述べられたのである。



(2016年4月7日)